

11月10日(日)

令和七年度 社会人特別選考（Ⅰ期） 入学試験問題

神道文化学部

小論文

— 注意事項 —

- 1 問題は3ページ、解答用紙は1枚である。
- 2 解答はすべて別紙解答用紙に縦書きで記入すること。
- 3 試験時間は90分である。

Q24A

りを一言でいえば、神々への奉仕と規定されよう。そして神道の祭りの特色は、村・町・国家など共同体の諸問題を解決するために、共同体の人々が元来は全員で神々に祈り感謝することにあつたと思われる。諸問題の中でもっとも重要なことは、食糧の取得であつたことは言うまでもなからう。稲米をはじめとする五穀が稔るかどうかは、自然の運行に左右された。太陽をはじめ自然の運行を支配するのが神々であつたという信頼があつたから、祭りが厳粛に執行されたと言えよう。年間の祭りに関するもつとも古い事例を記録の上でもとめると、七〇一年に編纂された『大宝律令』所収の神祇令（神々に関する規程）と推測される。そこには、以下のような祭りがみられる。春に五穀の豊作を祈る祈年祭（きねんさい、あるいはとしごいのまつり）があり、秋には新嘗祭（しんじょうさい、あるいはいなめのまつり）といって、豊穰を神々に感謝する祭りがある。夏には、田に水が行きわたるように祈る大忌祭（おおいみのまつり）や台風や水害などによって農業の妨害がないように祈る風神祭（かみかみ）がある。また夏に行われる道饗祭（みちあけのまつり）は、都の東西南北の四隅で執行される。その目的は都にやってくる邪霊や荒ぶる神を、あらかじめ迎えて食物を供え都に入らないように祈るという。

以上のように祭りの基本型と称すべき神祇令記載の祭りの諸例を眺めてみると、神道の祭りは個人のためではなく、共同体全員のために奉仕するということが、基本的特色となっている。その意味で祭りを通して神道の生き方を抽出しようとすれば、共同体全体のために奉仕ないし尽力することと捉えてよからう。

続いて、神社史を通して、神道の生き方の具体的内容を考えてみたい。神社崇拝の長い歴史の中で、他宗教においてはあまり見かけない特色が、人を神に祭る伝統である。人を神として祭るという日本人の神道的行為は、時代とともに変化し、第二次世界大戦以後現在に至るまでほとんど衰退している。明治以後キリスト教の神観念が日本人の間に徐々に浸透し、神とは全智全能の絶対神をイメージする日本人が増加した。そのため人間が神になることは有り得ない、と思うようになったのが一つの要因であらう。

古代においては例が少ないが、藤原鎌足（談山神社）、菅原道真（天満宮）などが、神として祭られた。近世においては有名・無名の人々が村・藩・国家など共同体の安寧のために尽力したことによって、神に祭られている。有名な例としては豊臣秀吉（豊国神社）、徳川家康（東照宮）、初代会津藩主保科正之（土津神社）、薩摩藩主島津斉彬（照国神社）などが挙げられる。また近代においては、とくに天皇や国家のために尽瘁し、その功績が著しい人々、たとえば楠木正成（湊川神社）、明治天皇（明治神宮）、乃木希典（乃木神社）、東郷平八郎（東郷神社）、戦没者（靖国神社）など周知の通りであらう。これらの人々のうち、菅原道真は怨霊神としてはじめ祭られたため、その他の例と異なっている。道真以外の

人々は、ほとんど藩や国家など共同体の平和や発展のために尽力した、と言ってよい。このように考えてみると、神社史の重要な一つの特徴といえる、人を神に祭る行為の中に、神道的生き方が窺われる。すなわち、共同体の平和や発展のために尽力することである。その意味では、前述した祭りの伝統を通して捉えられる奉仕の精神と一致することが了解される。

（安蘇谷正彦氏の文章に基づく）